

沖永良部島洞穴調査に際して、完全防水のニコノスを用意できなかったもので、一眼レフのミノルタSR T101、アサヒペンタックスS2を洞内撮影に使用した。カメラの防湿対策には気を使い、カメラを洞内に持ち込んだあとには、必ずシリカゲル（乾燥剤）の入ったビニール袋の中に入れておいた。どれだけの効果があるかわからないが、すこしはましと思われる。ミノルタSR T101に35ミリ広角レンズ、アサヒペンタックスS2には標準レンズを取付けた。いちがいには言えないが、洞穴には広角レンズが使いやすいようだ。狭いところが多く、どうしても近距離で写さなければならぬこともあるし、それに原則的には被写体にライトを当ててするピント合わせも、人手不足のためライトを当てないで目測距離で合わせる場合が多く、そんな時には被写界深度の深い広角レンズが便利であるからである。レンズ保護、有害な乱入光線の防止のため、フィルターとレンズフードは常時つけていなければならない。洞穴の天井から水滴がよく落ちてくるので、直接レンズについたらやっかいな事になるからである。

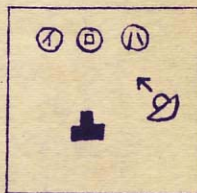
洞穴写真をとる場合、ストロボ、フラッシュ等の発光器をカメラに取付けて写すと影ができず、洞内が平べったく見え、人物は人形のように動きのない写真ができやすい。従ってA図のように発光器とカメラを左右に離すと影ができ、立体感がでてきて人物も生きてくる。左右に離せば離すほどその傾向が強くなると思われる。その反面、影が大きくなり写真にはハイライトからシャドーまでの細かい階調は得られにくくなる。B図のように発光器をあまり被写体に近づけて左右に離すと、イの部分は露出不足、ハの部分オーバーになるのでイロハ共に平均して光が当たるように発光器を後ろに位置するように気をつけなければならない。

カラー撮影の場合にはあまり発光器とカメラを左右に離すと、影が真黒なので見苦しくなる。すこしだけ離す程度でよく、色の微妙な変化で白黒写真ほど平面的には写らないようだ。

洞穴写真でよくする失敗は発光器の位置のまずさから思われる所に影がふきたり、近くの岩が真白に写ったりすることがある。発光した時の状態をよく考えて位置しなければならない。



A図



B図

